
Blake の Persephone 劇

— *The Book of Thel* と *Visions of the Daughters of Albion*

亀井桂子

I

ギリシャ神話のホメロス風讃歌に、一人の少女が野で花を摘んでいる場面がある。この少女は、Zeus と Demeter の間に生れた Persephone であるが、彼女は Zeus の弟の Hades が妻にと望んだ女性である。闇と陰うつの世界の主たる Hades であるだけに、母の Demeter は強くこれに反対していたので、Hades は Zeus の黙認を受けて、少女を誘拐するのである。さて、春の野には様々な花が咲きみだれていたが、その中に、Zeus の意を汲んでこの少女を欺くために咲かせた立派な水仙があった（水仙は死の花といわれる）。少女はその素晴らしさに心を奪われ、手を伸ばしてこれを取ろうとしたら、突然大地に裂目ができて、すべての人を待ちうける神（すなわち死の神）が、そこから神馬を御して現われ、いやがる少女を捉え、泣き叫ぶのをそのまま連れ去った。これが文学の上に伝わる Persephone 誘拐の物語の発端であり、このようにして、天上界で無心に遊んでいた Persephone は、地上界に降ろされ、暗黒の支配者の妻となったのである。

ところで、Blake の1793年の作品 *Visions of the Daughters of Albion* の表紙の絵では、一人の裸体の少女が、荒波たつ海の上に肢体を一杯に伸して躍動し、その頭上では、暗黒を象徴する Blake の創造人物 Urizen が、黒いマントをひろげて、少女に襲いかかっている。辺り一面は、嵐の様相である。少女は本作品の主人公 Oothoon であるが、彼女が巻頭で語る 'The Argument' は次のようなものである：

I loved Theotormon,
And I was not ashamed ;
I trembled in my virgin fears,
And I hid in Leutha's vale!

I plucked Leutha's flower,
And I rose up from the vale;
But the terrible thunders tore
My virgin mantle in twain.

これは、あたかも宿命の花を摘むことによって下界に連れ去られた *Persephone* の姿のようであり、これに続いて述べられる *Oothoon* の躡きは、*Persephone* のもらす嘆きの声のようである。この表紙の絵といい、又 'The Argument' に語られた本作品のテーマといい、明らかにその起源は、*Persephone* の誘拐に辿られるものである。Blake の愛の書と呼ばれる *Visions of the Daughters of Albion* は、その四年前に創作された *The Book of Thel* と共に、作品全体を通して、一人の若い女性がテーマになっている。両作品は、彼のいわゆる予言者のカテゴリーに入れられるものだが、難解で知られている予言書の中では、その抒情性と、象徴体系の未完成さなどで、この両作品は、他の作品と一風異った趣きをもっている。女性を共通のテーマとしたことが、両作品を一層密接に結びつける結果となったが、又、Blake の最も関心を示した数個のテーマの中に、*Soul* の転落のテーマがあり、*The Book of Thel* と *Visions of the Daughters of Albion* とを直接結ぶものが、この「*Soul* の転落」の問題であった。当時において、これは決して彼独自のテーマとは云えないが、生命に即して考え追求していったことは、Blake をきわめて魅力的に浮彫りする結果となった。

さて、*Soul* は天上界から地上界に転落して、人間の形をとって誕生す

Blake の Persephone 劇

るわけであるが、Blake の用いる表現によれば、天上界又は神の国、即ち Heaven は、無心界 (the world of Innocence) であり、地上界又は人間界、即ち Hell は、経験界 (the world of Experience) である。これ等の種々の表現は、同一の象徴的意味をもつことを銘記しておく必要がある。即ち Soul は、天上界から地上界へ、即ち Heaven から Hell へと遍歴するが、Blake はこれを象徴的に、無心界から経験界へ、と表現する。

再びギリシャ神話に両作品の起源を迎れば、天上界にあって、百合や雲や土くれと語る Thel は、天国における Persephone であり、Bromion に辱められ、Theotormon に背をむけられた Oothoon は、地上界に転落した Persephone であって、実にこの点において両作品は、Blake の二部作といえよう。The Book of Thel の終幕で、Thel はまだ地上界に降りて来ることを恐れ、天上界に留ってしまったが、Visions of the Daughters of Albion の開幕後、宿命の花を摘んで、いよいよ人間界に降りて来る。Thel が Oothoon になることによって、Blake の Persephone 劇の第二幕は、きっておとされるのである。小論では、The Book of Thel から Visions of the Daughters of Albion へと、いかにテーマが展開していったかを迎ってみたく思う。

II

Berger が「英語に於ける最も美しいエレジー」と讚美した The Book of Thel は、その第一部から第三部までは Songs of Innocence の中のかげりのない歓喜の詩にも匹敵して、神の救いの全き世界であるが、第四部に入って、突然この輝やかなしい天国に、黒雲が垂れこめる。しかしこれは、巻頭の 'Thel's Motto' によって、既に告知されていた経験界の影であった：

Does the Eagle know what is in the pit;

Or wilt thou go ask the Mole?

Can Wisdom be put in a silver rod,
Or Love in a golden bowl?

大空を飛ぶ鷺は、もぐらの世界である穴の中を知る筈はなく、叡智は、銀のむちで教えられるものではなく、又、愛は、黄金の鉢の中に必ずあるとは限らない。鷺は、詩霊の象徴とされているが、もぐらが生滅の母なる大地の象徴であることから、天上界を代表するものと考えてよかろう。悲劇は宇宙の法則に反抗することから生じるのである。度々 Blake の繰返す“*One Law for the Lion and Ox is Oppression*”¹ という個々の法則を認め、全体を一つの法則で縛ることの危険を述べた思想と同じものが、この ‘Motto’ に語られている。人間界の悲劇は、獅子と牛とを同じ法則で縛りうると錯覚することに始まるものである。

朝の美しさが、短時間ではかなく消え去るように、地上界に生れても、すぐ死を迎えねばならぬ人間の宿命を思う時、Thel は嘆かずにはおれない。² この嘆きから、上述の ‘Motto’ で語られた疑問が生じて来るのであり、疑問は、即ち「無心」な Thel の心に、暗黒の「経験」が、影を投げかけはじめたことを示す。この疑問を解くために、Thel は様々な生物に問いかける——まず百合が登場して、小羊に身を捧げる運命にありながらも、光に包まれ、朝のmanaを与えられることに感謝し、やがては死んで、永劫の谷間に栄えることの喜びを、Thel に説いてきかせる。しかし、日の出にきらきら輝き、すぐ消えて行く雲に、わが身を喩えて嘆く

¹ *The Marriage of Heaven and Hell*, plate 24. *Tiriel*, 8. 11. 8—9;
Visions of the Daughters of Albion, 1. 108

² Ah! gentle may I lay me down, and gentle rest my head,

And gentle sleep the sleep of death, and gentle hear the voice

Of Him that walketh in the garden in the evening time. (ll. 16—18)

悩み果てたものが心の憩を求めた最後のものは ‘gentle’ なものである。

この繰返される epithet は Thel の心情を表わして効果的であり実に美しく抒情的である。

Thel をみて、百合は雲を呼んで退き、次は雲が語ってきかせる：

…… Look'st thou on my youth,
And fearest thou, because I vanish and am seen no more,
Nothing remains? O Maid, I tell thee, when I pass away,
It is to tenfold life, to love, to peace, and raptures holy:

(II. 55—58)

「死すことは、十倍の生命、即ち無限の生命に、愛に、安らぎに、聖らかな歓喜に向うことです」と語る雲は、一見消え去ったように思えて、実はそっと地上に降りて来て、花を潤す露となって再生する喜びがあることを、Thel に教える。しかし、これも Thel を満足させることは出来ず、花を潤すことすらせず、何の役にも立たず生き「唯、死んで虫の餌になるだけです」と彼女は嘆きを続けるが、これに対する雲の答えは、実に整然として立派である：

Then if thou art the food of worms, O Virgin of the skies,
How great thy use, how great thy blessing! Everything that lives
Lives not alone nor for itself. (II. 72—74)

ここには、百合の語ったことから始まった自己滅却の生き方の尊さを、究極まで貫いている雲の主張が表われている。花のためであろうと、虫のためであろうと、再生することにおいて変りはない。自らが滅びた後、その生命を他のものにおいて生かしうるものが尊いのであって、この点に関しては、虫と花の間に優劣の差は無い筈である。何故なら「生きとし生けるものは、みな聖らかである」のだから。

数年後 *A Song of Liberty* において初めてうたわれる “For everything that lives is Holy!” の力強い Blake の生命讃美の思想の芽生えが、ここにはみられるではないか。この生命主義こそ Blake の根本思想であり、表現形式は様々に変化してくるけれども、どの作品にも、必ずその片鱗がのぞくものである。彼は *The Book of Thel* では、自己を滅却

し、他に委託する形で、それを表現した。そしてこれ以後の作品では、この消極的な生き方から、積極的に自己を打ち出す生き方へと、表現形式を変えて行くのである。*The Marriage of Heaven and Hell* はその最初の試みであり、いわば Blake のルネッサンスのようなものであった。従って、*Visions of the Daughters of Albion* の Oothoon の生き方が、自己を主張し、生命的なものを礼讃してやまない形をとったことも、*The Book of Thel* から数年間を経て、しかもその間 *The Marriage of Heaven and Hell* を物しているだけに、Blake の一つの発展と考えられるのである。

さて、雲に続いて現われた虫は、弱々しく泣くのみで、直接 Thel に語りかけることは出来ない。しかしその時、虫を含めてすべてのものの母なる象徴¹ mortality の象徴である土くれが、頭をもたげて、謙虚な態度で Thel に、神の愛が虫にも、土くれにも与えられていることを教える。この美しい土くれの最初の言葉は、やはり他の為の自己滅却の生命を説くものである：

O Beauty of vales of Har! we live not for ourselves.

Thou seest me, the meanest thing, and so I am indeed.

(II. 88—89)

慎み深い土くれの言葉は、そのまま一つの宗教観である。卑しいものをも愛される神が、その香油を土くれの頭に注いで、口づけし、縁の紐を土くれの胸にまわして、“Thou mother of my children, I have loved thee, And I have given thee a crown that none can take away.”

(II. 93—94) と申された、と語るのである。しかしどうしてこうなった

¹ この母の image は土くれが衰れた虫の上に身をかかめ、自らの生命力を乳のような柔らかい慈しみで注ぎかける詩行に表われている：

She bow'd over the weeping infant, and her life exhal'd
In milky fondness: (II. 86—87)

のかは、土くれにはわからないし、又わかる筈もないのだが、¹ 土くれは「生きて愛する」(yet I live and love) のだと云う。この“I know not, and I cannot know”ということは、大きな神の手にすべてを委ねている者の信仰の告白である。そしてこれを一層美しいものにしてしているのが、“Yet I live and love”という愛による積極的な生の営みの告白である。これこそは、Blake の終生変ることのない生活原理であった。

この土くれが最後に Thel にしてやったことは、Thel がこれから訪れようとしている地上界（即ち土くれ自身の家）での嘆きの声を、前もってきかせようということであった。これには約束がなされていて、一旦入れば死ぬまで去ることの出来ぬ世界ではあるが、Thel には、入って又すぐ帰ることが許されているのである：

Wilt thou, O Queen, enter my house? 'Tis given thee to enter
And to return: fear nothing, enter with thy virgin feet.

(II. 106—107)

土くれのこの誘いの言葉をもって、第三部は終わっている。

第四部に入って、Thel は土くれの忠告に従い、こわごわ永遠の門を潜る。この時 Porter の開けてくれるのは“northern bar”であるが、方向は Blake の象徴は体系中、重要な意味をもち、“Northern Gate”は“the Gate of Imagination”であり、これを通り抜けることによって、人間は神の座にまで上ることが出来、又“Southern Gate”は“the Gate of Intellect”で、これを通ると魂は、人間界 (the world of Generation) に墮落して行く——*The Book of Thel* では、これは“grave”という言葉で象徴されている。ここで考えたいことは、Thel が“Southern Gate”を通らず、“Northern Gate”を潜って、人間界に入ったことである。つまり逆になっているわけだが、土くれの約束によれば、Thel は仮

¹ But how this is, sweet Maid, I know not, and I cannot know;

I ponder, and I cannot ponder; yet I live and love. (II. 95—96)

に人間界を覗き見るだけであって、肉体を与えられて誕生するわけではない。唯、彼女の「想像」を通して、人間界に降り立って「未知の国の秘密」をきくのである。その国では、木は曲りくねった根を深く下ろしているという。“Root”は常に Blake にあっては、人間の肉身や、それから生じる煩惱を象徴するものである。人間界は一面では、Thelと同様に、彼にとっても“a land of sorrows and of tears where never smile was seen”であった。

ここで私たちは、第四部に入ってからプロット、内容の急激な変化に、驚ろかざるをえない。第一部から第三部までは、いわゆる Blake 的な意味での the world of Innocence であった。第四部では、the world of Experience に足を突っ込んだのである。二つのカテゴリーに分けられる時、常に Innocence を掲げるグループに入れられている *The Book of Thel* が、終曲でこのように Experience の接近を暗示しているのは、一見不思議に思えるが、これは決して *Songs of Innocence* に於て Blake の示した態度と異なるものではない。‘Infant Joy’や‘Laughing Song’のように、あどけなさ、無邪気さで終始する詩もあるが、しかし‘The Voice of the Ancient Bard’や‘Little Girl Lost’, ‘Little Girl Found’などが、かつては *Songs of Innocence* の中に入っていたという事実は、同様の疑問を起す。Blake は *Songs of Innocence* 出版後、五年経過して *Songs of Innocence and of Experience* の合本を出し“Shewing the Two Contrary States of the Human Soul”と副題を付したが、これが疑問を解いてくれはすまいか。彼は事物の両面を常に明確に見通す力を備えていて、この相反する二つの要素 (Innocence と Experience) を、人間の進歩に必須のものとみていた故、両方を同時に受け入れ始めるのである：

Without Contraries is no progression. Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to

Human existence. (*The Marriage of Heaven and Hell*, plate 3)

従って、Blake の無心の世界は、常にその背後に経験の世界を潜めている。第四部で、それまでとは全然異った世界を持ち込んだ Blake の意図は明らかで、これは ‘Thel’s Motto’ で歌われた主題の繰返しであり、*Visions of the Daughters of Albion* への掛け橋的役割を果たしている。

第四部は、批評家たちが既に言及してきたように、かなり後になって創作されたと考えるのは妥当である。詩の調子は、それまでとは一変し、確かに第三部との間には、段落が感じられる。この急激な変化は、一層劇的にプロットを展開させる結果となり、こういう構成は本書にとって、成功していると思える。この構成でとりわけドラマチックなのは Thel が、やがては地上界で告白するであろう自らの嘆きの声を、耳にする場面である。何と彼女は、彼女自身の墓地で、その声を聞く仕組みになっている：

She stood in silence, list’ning to the voices of the ground,
Till to her own grave-plot she came, and there she sat down,
And heard this voice of sorrow breathed from the hollow pit.

(II. 115—117)

虚ろな死人の穴から漏れ来る悲痛な声は、恐る恐る腰を下ろしている、人間界の苦悩に未だ遭うことのなかった少女にとって、あまりに大きな衝撃だった。少女に出来たことといえば、土くれの約束に感謝して、元の天上界に逃げ帰ることしかなかったであろう。ここには、第三部までに歌われた美しい自己滅却の世界と対照的に、人生の実相が暴露されている。しかし、数々の経験界の問題を提起しておきながら、Blake は本書ではまだそれとまともに組み打ちをするところまで行かず、唯、問題提起に留めた。これが実際の闘いとなって表われるのは、*The Marriage of Heaven and Hell* であり、又 *Visions of the Daughters of Albion* に於てである。前者は、あらゆる点で Blake の特色を打ち出した作品であるが、*The Book of Thel* との関連は、後者を辿る方が、問題が限定されてく

るだけに妥当と思われる。何故なら、Thel が脅えた声の語るのは、人間の五官 (five senses) に関する問題だからである。とりわけ、最後の疑問：

Why a tender curb upon the youthful, burning boy?

Why a little curtain of flesh on the bed of our desire?

(ll. 126--127)

に表われた sexual desire に関する問題は、そのまま *Visions of the Daughters of Albion* の中に繰返されていて、それがそこでは最も重要なテーマとなるのである。*The Book of Thel* では未解決のまま、束縛された欲情の絞り出す嘆きの声は、疑問の形で終わっているが、それは Thel が “Northern Gate” から入って来たからであり、まだ Soul は実際に転落していないからである。私たちは、ハルの谷間に逃げ帰った少女が、今度は “Southern Gate” から人間界に降りて来る日を、待ち望むのである。

III

Visions of the Daughters of Albion は *Daughters of Albion* の嘆きの声ではじまる。これは、ギリシャ劇のコーラスのように、途中で二回と終曲とに出て来て、作品全体を結ぶものである。象徴としての *Daughters of Albion* は、*Jerusalem* に出て来るけれども、本作品に於てはまだ象徴は確定せず、法の束縛をうけている人間の魂を、寓意的に表わしているにすぎない。しかし *Albion* は、常に人間一般の象徴であるから、*Daughters of Albion* は、Blake の生きた18世紀末の社会に於ける女性の嘆きを巻頭で漏らし、その時代を表わす役割を果たしていると考えてもいいであろう。まだ革命児 Orc は地上に現われず、偽善者 Urizen が全体を支配している社会であり、その中で、Urizen の頑なな形式主義に縛られ、欲望を抑えられて魂の自由を失った女性が、やがてはその束縛から解放さ

れることの約束された国, America¹ の方に、嘆きの声を向けている。Oothoon は、まだ娘らの一員ではない。彼女は、まだ天上界に居る Thel であり、彼女がこの一員となるのは、宿命の花を摘んだ後である。この巻頭の娘らの嘆きは、これから展開する場面への前奏曲である。

The Book of Thel の最初の場面と同様に、やさしく嘆く少女は、Leutha の谷間で marigold をみつけ、その美しさにみとれて、花に語りかける：

Art thou a flower? art thou a nymph? I see thee now a flower,
Now a nymph! I dare not pluck thee from thy dewy bed!

(II. 6—7)

ここには、虫をみつけて驚ろいた Thel の響きが再びありはしないだろうか：

Art thou a Worm? Image of weakness, art thou but a Worm?
I see thee like an infant wrapped in the Lily's leaf.

(*The Book of Thel*, II. 80—81)

これは Blake のいわゆる twofold vision である：

For double the vision my Eyes do see,
And a double vision is always with me.
With my inward Eye 'tis an old Man grey;
With my outward, a Thistle across my way.

(*The Letters*, p. 77)

真なるものをみつめるのは、心の目であって、単なる感覚としての目ではない。感覚としての目は、物質的知覚しか出来ない。² Blake の幻想は、

¹ Oothoon は “soft soul of America” と呼ばれている。“America” は Damon によれば “freedom in the realm of the body (=west)” である。

² Single vision is purely material perception; in double vision intellect has made its contribution; (*Letters*, p. 77 note)

彼の心の目が捉えたものであって、俗に云う pantheism とは立場を異にする。それは、Blake の心に存在する一つの像であるのだから。

Oothoon の驚ろきに対して、花は答える：

..... Pluck thou my flower, Oothoon the mild!
Another flower shall spring, because the soul of sweet delight
Can never pass away. (II. 8—10)

花の精の語る「美しい歓喜の魂は、決して消え去りはしない」ということは、本作品で、Oothoon を弁護する大切な主張となって展開する。即ちこれは、この後彼女が受ける様々な試練に打ち克つための、根本の思想となるのである。Persephone の悲劇を象徴するこの花のために、Oothoon は相愛の Theotormon が居ながら、Bromion に辱しめをうける運命におかれる。三人の立場を物語る詩行には、人間の宿命に対する、怒りと悲しみの混入した心の痛みが表わされている：

Then storms rent Theotormon's limbs : he roll'd his waves around,
And folded his black jealous waters round the adulterate pair.
Bound back to back in Bromion's caves, terror and meakness
dwell :

(II. 26—28)

Theotormon はなすすべもなく、洞窟の入口に坐って、密かに涙を流しているのみである。

Bromion は暴力によって Oothoon を奪い、一見 immoralist のように思えるが、自ら犯した女を harlot と呼び、結婚という形式的束縛で、彼女の精神まで縛っていると考えるところは、いわゆる moralist である。Theotormon もその一味であって、彼は harlot と呼ばれた自分の恋人を許すことが出来ない。三人の中で Desire (Blake 的な意味での Energyの根源としての Desire) を象徴するのは、Oothoon である。よく云

われるように、Theotormon が Desire の象徴であるとすれば、¹ それは非常に弱い Desire で、影的存在になってしまったものであろう：

Those who restrain Desire, do so because theirs is weak enough to be restrained; and the restrainer or Reason usurps its place and governs the unwilling.

And being restrained, it by degrees becomes passive, till it is only the shadow of Desire.

(*The Marriage of Heaven and Hell*, plate 5)

これは *The Marriage of Heaven and Hell* に於て、Blake が革命的な宣言をした抑制されえない人間の真の強さである Desire を述べたものであって、Desire は Reason に対立するもので、Reason に縛られてしまうような Desire は、実体の影であるにすぎないとする主張である。Theotormon は、自己の欲望を実行しえない shadow of Desire で Reason たる Bromion に支配されてしまった弱い人間である。一方真の Desire である Oothoon は、縛られても影になることは出来ず、やがてその束縛をふり解き、自らの内なる Energy を信じて叫ぶのである：

How can I be defil'd when I reflect thy image pure? (I. 77)

Harlot と罵られ、淫らな女と踏みにじられ、一時は Theotormon の驚に「この汚れた胸を裂いてしまっておくれ」と嘆願するまで弱くなっていた Oothoon であったが、これは又、何と美しい人間的な叫びであろうか。彼女にとって、掟は真実ではなく、自ら信じられるもののみが真実であった：

Everything possible to be believ'd is an image of truth.

(‘Proverbs of Hell’)

¹ Sloss & Wallis は Bromion を immoralist, Oothoon を a-moralist, そして Theotormon を moralist と考えている。これに対して Damon や Schorer は Bromion を Reason, Theotormon を Desire の象徴としている。

今や苦悩が彼女を賢くし、その経験が虚偽をはっている二人の男性に、堂々と立ち向う勇気を与えてくれるのである。彼女には、朝が訪れたように resurrection が起っている。自分の内に強く感じられる Energy を欺くことの出来ない Oothoon は、五官が人間を閉じ込めてしまうという主張に満足せず、個々の動物の衝動を例に上げて反論する：

With what sense is it that the chicken shuns the ravenous hawk?
With what sense does the tame pigeon measure out the expanse?
With what sense does the bee form cells? Have not the mouse
and frog
Eyes and ears and sense of touch? Yet are their habitations
And their pursuits as different as their forms and as their joys.

(II. 63—67)

これらの動物でさえ、五官を越える何かを持って、各々その内なる衝動に従って行動する——鶏は鶏らしく、鳩は鳩として行動し、これらの動物を一つの法則にはめることは出来ない。衝動とは、各々の本能であり、身体に内在する神の声である。人間は、この内なる神聖な声に耳を傾けることをせず、外から与えられた道德律に自らを縛って、これらの動物より劣った生き方をしなければならないのだろうか？ この Oothoon の反論は、墮落しきった形式主義者の偽善に、精神革命を行うものである。この力強さは、彼女の心に根ざした “How can I be defil'd...?” という疑問に、花の教えてくれた “the soul of sweet delight can never pass away” という答を自分のものにした彼女の、真に目覚めた姿から、必然的に生まれるものである。これに対する Theotormon の言葉は、誇張的な戸惑いの問であるにすぎず、彼は唯、彼の生命が終ってしまったことのみを知っている：

Tell me where dwell the joys of old, and where the ancient
loves,
And when will they renew again, and the night of oblivion past,

That I might traverse times and spaces far remote, and bring
Comforts into a present sorrow and a night of pain? (II. 90--93)

これは敗者の嘆きである。一方、Bromion もその洞窟を震わせて云う：

Ah! are there other wars, beside the wars of sword and fire?
And are there other sorrows beside the sorrows of poverty?
And are there other joys beside the joys of riches and ease?
And is there not one law for both the lion and the ox?

(II. 105--108)

これは Urizen の主張で、すべてを一つの掟で統一しようとする、抑制された消極的な、従って偽善的にならざるをえない考えである。

Theotormon の因習に抑えられていたずらに自己の宿命を嘆いている生気のない愚痴と、Bromion の一見強そうな、頑固な因習そのものの形式主義的思考を聞いて、Oothoon は最早彼等に巻き込まれて、自分を失ってはならぬことに気付く。“O Urizen! Creator of men! mistaken Demon of heaven!” に始まる彼女の叫びは、終幕まで続くものであるが、Urizen は人間界を支配する Reason の象徴であり、Oothoon は、Bromion の言明が Urizen を代弁するものであることから、こう呼びかけたのであろう。Urizen は表紙の絵で、海の上に黒雲をひろげている神として描かれている。海は、時間と空間に遮られた狭い人間界の象徴である。かく考える時、Oothoon と Bromion が背中合わせに縛られて、海辺の洞窟に居る意味も明らかにされてくる——洞窟は、人間の頭脳（理性）を象徴し、背中と背中で結ばれていることは、真実を洞察しえず、盲目同然に他をみつめていることを意味する。この時まで、Oothoon は Bromion の“terror” に対しては、おとなしい小羊のような“meekness” であったが、今や“meekness” は転じて怒りとなる。丁度 Little Lamb が、経験界では Tiger の姿をとったように、経験界で Oothoon は、柔順から怒りへ転身する——自己の Desire に忠実であるためには、Energy を信ず

ること、そして Energy の通用しない場合は、怒りによってそれを表明するより他ない。Oothoon の声は、怒りに溢れ、それは必然的に、生气に溢れた言葉となる。Urizen の喜びは涙であるが、Oothoon のそれは愛である：

How can one joy absorb another? Are not different joys
Holy, eternal, infinite? and each joy is a Love.

(II. 116—117)

どんな喜びであろうと、愛から生れた喜びである以上、聖らかで、無限の広がりを持ち、一つの喜びの為に、他の喜びが犠牲になる筈はない。喜びに表現された愛とは、Urizen の主張するように利己的なものではなく、海綿が水を吸うように他を吸うばかりであってはならない。それは抑えることも、消し去ることも出来ない —— because the soul of sweet delight can never pass away. 自由な翼をもって飛翔して行くものである。やがて Oothoon の怒りは、墮落した形式主義的宗教に向けられる——青春に燃え、道徳律によって自己の運命が定められていることを未だ知らぬ女性が、自らの忌み嫌う男性と結びつけられていていいものだろうか。これは形式主義的宗教の定めた結婚という一つの筈であるが、それによって自由なる魂、真の Desire が抑えられていいものだろうか。肉体と精神は切り離して考えてはならない。Sexual desire の志向するところは、又精神の求めるところであらねばならぬ。宗教の墮落は、この霊肉一致を無視した点に始まった。Sexual desire は汚らわしいものではなく、精神への最も主要な入口である。大切なのは、真正らしくみえることではなく、各人々々の心髄において真正であるということである。それらしくみせるための虚勢や、虚偽ほど、人間の尊厳を傷うものはない。一女性の経験から得た苦悩と葛藤を描くことにより、sexual desire を汚れたものとみる従来の因習的な考えと対抗して、それを人間の尊厳と結びつけて、精神と同等の位置にまで高めたところに、本作品の最も大切な主張があるの

Blake の Persephone 劇

ではなかろうか。自由な魂をとりもどした Oothoon は、終幕でこう叫ぶのである：

Arise, you little glancing wings, and sing your infant joy!

Arise, and drink your bliss, for everything that lives is holy!

(II. 214—215)

これは Blake の望んだ理想の女性であった。しかし、彼は決して樂觀してはいない。現実はやはり Theotormon を沈黙のまま海辺に坐らせ、Daughters of Albion に Oothoon の嘆きの声を反響させつつ、本作品を終らせているからである。

IV

The Book of Thel から *Visions of the Daughters of Albion* へのテーマの展開は、Soul の転落の過程に辿られるものである。Soul は、天上界では Thel、転落して地上界では Oothoon として描かれている。自己滅却と他への奉仕精神とが傷われることのない、愛と慈悲とに満ちた天上界を去りえなかった Thel が、宿命によって人間界に降ろされ、Oothoon となって誕生し、否応なしに憎しみや悲しみや虚偽の中に投げ込まれて、偽善の神 Urizen に対して戦い、苦しい葛藤の末、自己の自由を守り抜くのである。Oothoon には、Northern Gate は開かれていなかったし、Southern Gate から人間界に降りてしまった彼女に残された生き方は、自ら経験の茨を切りひらくより外なかった。恐いものをみれば、親の胸に逃げることの許された子供の無心界から、もはや逃げ場のない経験界に投げ込まれ、自らも子供から大人へ、即ち Thel から Oothoon へと成長していった一女性の葛藤の様子は、この時代の Mary Wollstonecraft の主張を伝える一つの寓話でもある。人間界への誕生は、必然的に苦悩を伴う——それは自己の外及び内にかけてられた束縛（即ち、道徳律と五官）と Energy との葛藤である。Oothoon は、これと闘ったし、な

おも闘争中である。その闘争が終る世界は、まだ描かれていない。私たちが期待したいのは *Persephone* 第三幕、即ち *Persephone* の天上界復帰である。しかし *Blake* は、*Persephone* 劇を二幕で閉じ、ついに三幕目は開かれなかった。それは、彼のテーマが、最早一女性の遍歴を辿るものではなく、大きく人類全体、宇宙全体の問題へと発展し、他の神話を生む方向を辿ったからである。従って、第三幕は書かれなかったけれども、*Blake* の永遠のテーマ、即ち、*Innocence* 界から *Experience* 界へ、そして遂には *Richer Innocence*¹ の世界へと到達する *Soul* の遍歴は、他の作品においてなされている。*Richer Innocence* とは、*Experience* を経たものみに許される理想であって、苦悩を知らぬみどり児の *Innocence* に再び帰ってきた経験界の勝利者であり、人生の深みを知りつくして無心に帰ることを示す。*Persephone* 神話が中途の幕切れとなっても、この一女性を通して、私たちは人間の宿命的な段階としての苦悩と歓喜とを考えることが出来る。そして更には、いつかは *Richer Innocence* の世界に到達する *Oothoon* を期待できるのではなからうか。

1 “……*Innocence* is penetrated by *Experience* and both are transformed into a richer *Innocence*.” (*Schorer*, p.162)

テキスト : *Sampson, J., The Poetical Works of William Blake, Oxford U. P., 1961.*

Sloss, D. J. & Wallis, J.P.R., William Blake's Prophetic Writings. 2 vols., Oxford, 1957

参考文献 : *Damon, S. F., William Blake, His Philosophy and Symbols, Peter Smith, 1958*

Keynes, G. (ed), The Letters of William Blake, Hart-Davis, 1956

Raine, K. & Others, The Divine Vision, Studies in the Poetry and Art of W. Blake, Victor Gollancz Ltd, 1957

Schorer, M., William Blake: The Politics of Vision, Vintage Books, 1959